

2021 年度前・後期 授業改善アンケート集計結果に対する意見

—文芸学部—

学部長 林田 伸一

2021 年度もコロナ禍の下での授業を余儀なくされました。前期は、緊急事態宣言の発出に伴ない、その期間のほとんどで面接（対面）授業が実施できませんでした。また、後期は事態がやや改善され、ゼミナール、演習、語学、実習などは対面で実施できましたが、講義科目は遠隔授業となりました。

こうした状況を踏まえて授業改善アンケートを見ると、設問1「円滑に授業を受けることができた」が、4.48 と高い値を示していることに、まず安堵しました。その他の設問についての数値も、コロナ禍にもかかわらず授業がしっかりと行われていたことを示していると思われます。

また、2020 年度のアンケートと比較して、とくに良い数値が出ているのは、設問8「教員との双方向のやりとりが十分にあった」です。これは、2020 年度と比べれば対面授業が多かったことによるところが大きいと思います。対面授業の重要性がわかります。対面授業の重要性については、「授業を通じて身についた資質・能力」についての回答にも表れていると考えられます。(コ)「コミュニケーション能力」、(サ)「プレゼンテーション能力」にマークをした学生さんが 2020 年度よりも増えています。(コ)「コミュニケーション能力」については、2020 年度は前期 15.3% 後期 13.7 %でしたが、2021 年度は前期 19.0%後期 21.4%となっています。(サ)「プレゼンテーション能力」については、2020 年度は前期 2.3% 後期 9.3 %でしたが、2021 年度は前期 13.5%後期 14.9%となっています。

他方、授業科目の性質によっては遠隔授業が有効であることも、本学のみならずさまざまな場所で報告されています。このアンケートでは、その点を直接に測る設問はありませんが、いくつかの項目の高い評価の背景にそのような要素があるかもしれません。

授業を通じて身についた資質・能力として、(エ)「言語運用能力」に多くの学生さんがマークしていますが、これは文芸学部の特徴です。2021 年度前期は 32.7%、後期は 47.1%、と前期後期で差がありますが、これは後期に論文やレポートを書くことが多いからでしょうか。

最後に、2020 年度前期のアンケートへのコメントにも書きましたが、2020 年度と同じく 2021 年度も、回答率が低かったことに留意する必要があるでしょう。回答してくれた学生は回答しなかった学生と異なる特徴を持っているのか、そのことによりアンケートの回答に一定の偏りが生じているのか、検討すべき点ではないかと思ひます。

以上